優秀賞

「私の夢」

中西　萌

良い教師、良い学校とは具体的にどういうものを指すのだろうか。これは「教育」を考える上で非常に重要なことであり、「学校」というものが生まれてからの大きな課題であるにちがいない。そもそも「教育」というのは、古くから親から子へと、地域の人々が未熟なものへと、非道徳的な道へと歩まないように、道を正すというのが本来の姿だ。ところが「学校」という「教育」をすべき場が、堂々とできたことで、「教育」の場が身近な人から、半分、いやそれ以上の値で離れていき、学校へ移っていったように思う。いや、押しつける場ができたと言った方が正しいのかもしれない。今日では自分の子供が誤ったことをしたときに、親は大抵学校や教師のせいにする。しかし、子が何か大きな事を為し遂げたとき、親は学校のおかげだと言うだろうか、いや言わないだろう。責任というものが学校に押しつけられる中、良い学校とは何かということを考えてみたい。

教師とは何だろう。ただ単に、良い学校、良い会社に入るための知識を教え込む人のことを指すのだろうか。確かに教師というのは「教える」という字が付いている。では師とは何だろう。師とは恩師の師であり、先生という意味である。どうやら教師とは、数学の公式や科学の元素記号のみを知る人ではないらしい。では、現在本当の意味での教師は存在するのだろうか。いや、恐らくそんな教師はほんの一部であろう。もしかしたら高学歴化が進む現代では、そんな教師は必要ないのかもしれない。しかしそれに伴って少年犯罪やいじめや不登校がまるで反比例のように増加しているように思えてならない。「生きることの大切さ」を教える人が少なくなった今では当然のことかもしれない。現在の学校では、「道徳」の授業を取り入れているところが多い。私が小・中学校でその授業を受けている時、よくこう思った。「ふーん。」それだけ、ただそれだけである。あんなに長い間かけてやった道徳も「ふーん。」で終わりである。その先がない。「○○さんがボランティアで自転車の路上駐車の撤去をされています」と言われても、「すごいなぁ。」で終わるのだ。それで適当に感想文を出して終わる。今になって思うと、せっかくの道徳のために設けられた時間は、余り身に付いていないように思える。「差別はいけない」、「命は平等」そんなことは言葉では分かっている。しかし、形だけだ。教えられ

る側がこんな事ではいけないと思う。しかし、肝腎の教える側はどうだろう。本当に自分自身が納得し、考えたことを教えていたのだろうか。カリキュラムに沿った形だけの授業になっていなかったか。教師が形だけで教えているのならば、教えられる側も形だけで受けるということになってしまう。これは授業での道徳だけのことではない。その枠にとらわれない「道徳」というものを教えるに当たって、教師は生徒と一線を引いて教えてはいないだろうか。「教師」という枠にとらえられたまま、生徒と接してはいなかっただろうか。要するに私が言いたいのは、教師は時として教師であってはならないということだ。教師が教師として教えるべき事を教え、伝えるべき事は「一人の人間」として伝えるべきである。生徒と接する際、教師は生徒と同じ台の上に立ち、時に背を押し、時に話し相手になることが大切だ。良い教師とはそういうものではないだろうか。前に立って手を引っ張ることが教師のすべてではない。前述のような接し方ができれば生徒も「一人の人間」として接してくるのではないだろうか。

では良い学校とは何だろうか。一日における時間配分を考えると、睡眠時間を除くと、家庭と学校での時間の割合はほぼ同じである。つまり、学校とはそれほど大きな存在で、生徒及び教師に影響を与えているということだ。そう考えると、やはり

学校生活が充実していると、生活自体も充実し、活気が生まれてくるのだろう。学校とは、学び生活する空間の総称である。その空間を埋めていくのが生徒や教師である。つまり、良い学校とは、生徒や教師が形成していくものである。「良い学校」、それは人によって考え方が違うだろうが、私はこう言い切ろう。「笑顔が絶えない学校」これが「良い学校」であると。夏に燃えさかる向日葵のような、冬のキラキラした雪のような、そんな笑顔があふれた学校が、良い学校ではないだろうか。

私が今まで述べたことは所詮理想である。だが私は理想で終わらせたくはない。だから私は教師という職に就きたい。私が「生徒」である今感じたことを、教師となって活かしてみたい。皆が桜の花のようにほおを染めて笑い、枯れゆく秋の草木を見て命のはかなさ、美しさを感じて欲しい。私がここで述べたことを、身を持って証明したいのだ。大人が子供を分からなくなってきている今、私は「教師」として「一人の人間」として、子供らが伝えたいメッセージを、拾い集めてみたい。人生においてのわずかな学校生活を充実させてあげたい。親と子と教師とが、深くつながった教育にしたい。卒業生からも「先生」と笑顔で呼ばれる教師でありたい。望むだけではなく、私はこの夢を実現するために、努力しようと思う。